

# 読む



# ビタミン

地域に根ざす工務店

・リフォーム店を元気にするビタミンです。

## 2017年12月号

### 「今月のひと言」

ただの思いつきで出来るようなものは、世の中に断じてない  
(アインシュタイン)

今回は今年度の締めとして、新年を迎える心持ちガイドを、アインシュタインの言葉からお届けいたします。少し長いですが、読んでみてください。

アインシュタインの相対性原理は、瓦職人が高い屋根から転げ落ちるのを見て思いついたという噂があった。アインシュタインが来日したときも、ある人がそう聞くと、あの温厚なアインシュタインが不満の色を浮かべ、

「それは、もつての外です」と言って、こう言葉を続けた。

「確かに瓦職人が落ちたのは事実です。だが、それからヒントを得てあの原理を発見したのではありません。それ以前から散々考えたり実験したりしていたところに職人の落ちるのを見たのです。

よく世の中ではリンゴの落ちるのを見て、ニュートンが引力を発見したと申しますが、それも同じことです。引力というものがないと考えると、リンゴが落ちただけの話です。リンゴが落ちるの目で見ただけで、引力を発見するなんて馬鹿なことはありません。

心で見ることが重要です。

心で考えていることに、ちょうど当てはまったものを見て、一種のインスピレーションを受けるのです。

かつて私は自分の書斎の窓が大きすぎるので半分に縮めて、下に戸棚を作ったことがありました。それを見たある人が、これは良い思いつきですね、と言いました。でも、決して思いつきではありません。長い間、大きすぎる窓が嫌でたまらず、なんとかしたいと気を使っていたところに、ふと下半分を戸棚にしたらという考えが浮かんだのです。

科学上の大発見も同じことです。

ただひょっと思いついたのでは断じてないのです。インスピレーションは決して空虚な心には与えられません。それを得ようと血のにじむような苦心、努力をしている心にもみ与えられる尊い賜物です。

無から有は生じません。

長い苦しい努力なしに、ただの思いつきなどというものはないのです」。

偶然でできるようなものは世の中にはひとつもないのですね。それは商品やサービスの開発にしろなんにしろ、同じことのようにです。

1年間のお付き合い、ありがとうございました！



未来に向かい帆を上げよう

# 羅針盤

住宅業界の動向やこれからの住宅事業に関するヒントを提供する「羅針盤」。ちょっと気になる話題から明日の事業運営を考えてみましょう。

## 「余計なお世話」

最近余計なお世話に触れる機会が少なくなった。社会的・地域的な関係なのか、時代背景や家族構成の変化が関係しているのかわからないが、確実に、余計なお世話が少なくなってきた気がする。

行き過ぎると煩わしさやうっとおしさにつながることも多いが、実はこの余計なお世話には素晴らしい効果が潜んでいるらしい。

東京を中心とした都会やその一部ではなくなっているように見えるが、地方に行けばまだまだ余計なお世話が標準な場所もある。場所やコミュニティによってはまだ余計なお世話が存在しているのかも知れない。

TVドラマや映画などあらゆるシーンや作品で、この余計なお世話にまつわるものが増えてきている気がする。成長過程の子どもが親に向かって「余計なお世話だよ」なんて言って、親子喧嘩になってみたり、友人関係がぎくしゃくしたりするといったシーンだ。

概ね、この余計なお世話はコミュニケーション

や「和」を壊すものとして扱われているが、そもそも余計なお世話をしなければ、互いの気持ちなど分かり合えないのではないだろうか。ある本には「余計なお世話がニートを無くす」と書いてあった。

ニートとは15~34歳までの非労働力人口のうち通学・家事を行っていない者を指すとウィキペディアには載っている。いわゆる引きこもりから始まる「若年無業者」というらしい。

ではなぜニートになってしまうのか。

原因はいろいろあるのだろう。「いじめ」「自信喪失」「認められない環境」。社会との距離を置くことで自分自身を守ろうとする行為なのかもしれない。しかし親が健在のときはそれで良いとしても、養ってくれる誰かがいなくなったときどうするのだろう。

そこでニートから脱却する方法のひとつが余計なお世話をすることだというのだ。

ニート本人から何度「余計なお世話だ！」と言われても繰り返し余計なお世話をすることが重要らしい。

余計なお世話を続けることで徐々に自信が蘇ったりその人にだけは認められていると思いつたりしてニート状態から抜け出す日がくること。

では、会社組織ではどうだろう。

上司や先輩は余計なお世話をできているだろうか。

つつい余計なお世話をすると嫌われるからと



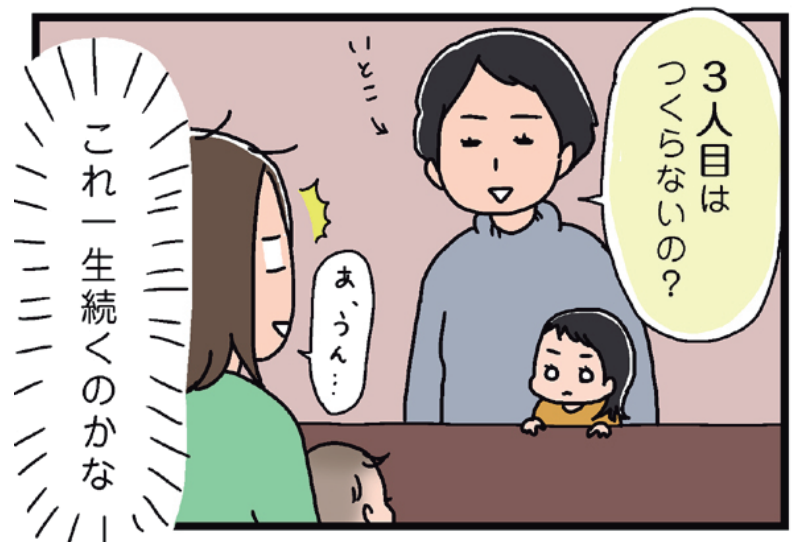
か、自分には関係ないからと部下や後輩に無関心な態度を取っていないだろうか。本音と建前をうまく取り繕う最近の若者は、上司や先輩が余計なお世話をしてこようが無関心であろうが上手に対応する。通常ではなんの問題もなく業務をこなしていくだろう。しかし、何らかのトラブルや自分では補いきれない失敗をやらかしたとき、彼らの本当の強さが見えてくる。会社を辞めれば済む話ではない。会社の信頼や信用を一瞬でなくしてしまうことに繋がるかもしれない。



そこから逃げ出したくなる当人に、どこまでやらせるかが重要になる。それ以上に、その人間のやる気とハードルを乗り越える能力の目を摘むことになってしまわないような対応が望まれる。

会社に必要な人材とはどのような社員かと考えれば、売上を確実に上げる人より信頼や信用を失わない対応ができる人。儲かりそうなビジネスを探すことに長けている人より壁を乗り越える胆力がある人なのではないだろうか。優れた人間を採用したいのはやまやまだが、採用した社員を育てていくことも会社の役割だとすれば、いろんなシーンで余計なお世話をし、その人間に触れ合っていくことこそ人を育てる方法なのではないだろうか。

人と人との関係が気薄になればなるほど社会や社内にニート状態の人が増えてくる。もう一步踏み込んだ余計なお世話をすることが、これからの成熟社会に必要なのではないかと感じる。





成果を出す

# 販売促進の進め方



本当に成果を出すには、まず自分を知り、相手を知り、戦略を立てること。

戦略を立て、目標を設定し、ツールを作り実践し、効果測定し、改善する。

これができるれば必ず成果はついてくる。

その販売促進の進め方を新企画として順を追って解説・ご提案いたします。

9

ツール開発 / 広告の忒

● 会社看板

目的：会社周辺重点エリアの方々の認知度を高めるため / ホームページへの誘客

クルマの通りすがりに見ることも多いので、パッと見て分かるようにスッキリと。看板のイラストやキャッチ、ロゴ等を覚えてもらえばチラシが入った時に効果的。ホームページへの誘導もポイント。

現場やイベント会場ののぼりも同じデザインで統一しましょう。



# 住まいは幸せに暮らすためにあるのです。

# 暮らしのここ3

住まいづくりの目的が変わった現在。

生活者であるエンドユーザーは住まいに何を望んでいるのだろう。

我々が考えるその答えは「幸せな暮らし」。

価値観が多様化した現在で尚且つ定義が曖昧な顧客の幸せ感とはどのようなものなのか。

そこでターゲットとする顧客のニーズや想いを探り、

選ばれる住宅会社になるための住まいづくりを一緒に考えていきましょう。

## 「住宅建築家として」

### 「設計者としての刺激」

現在、建築設計者として仕事をされている方はどのような動機で今の仕事を選んだのだろう。純粋に建築物を設計することが大好きで、小さなときからあこがれていた職業ですという方もいらっしゃるだろう。そうではなく学校を卒業したとき何となく今の会社に就職した結果、現在の仕事をしている方も多いのではなかろうか。

設計者には、法律の知識や建築の技術や知識が必要であるが、同時にクリエイティブな発想やデザインセンスを望まれる。特に意匠設計とい

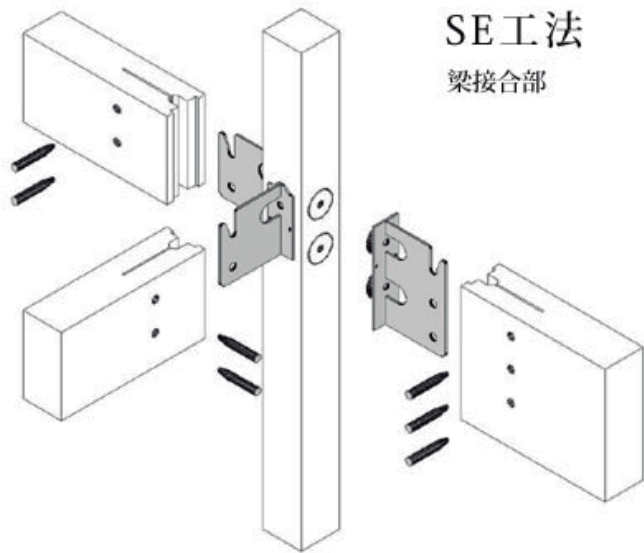
う分野に携わる設計者には必須の条件とも言える。実は、構造設計者や設備設計者にもこのクリエイティブな発想やデザインセンスはあったほうが良いとも思うのだがあまり表立った要望は聞かない。

住宅設計においても新しい建材や工法が、今までにない暮らしを実現してくれる環境が整ってきた。例えば在来工法で間取りを考える場合、通常2間までしか梁をとばさない。これは上階の加重や梁の自重を考えた場合の限度だと教えられた。しかしSE工法やビッグフレーム工法などを使えばそれ以上の柱間隔で間取りを考えることができる。ありきたりの発想ではこれらの工法のメリットを活かす間取りにはならないかも知れないが、クリエイティブな発想をもつてすれば思いもかけない間取りが出現するかも知れない。

設備設計においても建材メーカーから今までにない新製品が出てくれば、通常とは違った新しく豊かな暮らしを実現する設備仕様を考え付くかもしれない。

いずれにしてもクリエイティブ性やデザインセンスは、何らかの刺激を受けることから発想す





そういえば、最近新しい人と出会ってないかも。  
そういえば、最近行ったことのない場所に行こうとしてないかも。

そういえば、最近新しい本を買ってない。  
もっともっとアグレッシブに行動したい。ふらっと旅にでも出てみようかな。

初めて言ったヨーロッパは本当に刺激的だった。

初めて訪れる国は本当に刺激満載だった。  
そんなこと考えているうちに行動しよう。

そうだ！京都行こう！

ることが多い。新しい建材、新しい工法、新しい設備などはそれに相当するが、必要なのは新しさというか自分の知らないものとの出会いなのだろう。

ということは刺激とは、未知なる物との出会いとも言換えられる。

狭い世間で日常を過ごしていると刺激は少ない。いろんな物にチャレンジしたり、いろんな場所に出向いてみたり、いろんな人と話をしてみたりすることが、未知なる物との出会いを創り、良い刺激を受ける機会を増やす。

住宅設計者として、いろんな刺激を受けたいと思いつながらなかなかその機会に恵まれない。そう、単に言い訳なのだけれど、改めて最近刺激が足りないと感じている。





工務店さんがいるところなら...

日本全国東奔西走どこへでも！

呑んで騒いで時折仕事。



# 渡り鳥 旅日記



五十五合目



嗚呼、我が良き友よ、横浜よ。

今回もいつのも渡り鳥とは違うお話。

11月25日、我がロックバンド「WHOTA」の結成41周年記念ライブを行った。

12月3日には、先月で紹介した小学校時代の恩師を囲んでの同窓会行った。

12月9日、その恩師と一緒に野毛、伊勢佐木町界隈を散策した。



▲WHOTA 結成41周年ライブ



▲野毛の裏路地



▲野毛商店街によって建立されたひばりちゃん像

地元の音楽仲間とライブハウスでクリスマスパーティをする予定だ。

年明けにはおいらが実行委員をしている、金沢区のオヤジバンドのライブも行う。

だから今年の冬は横浜の連中と横浜どっぷり！歌って、食べて、呑んで...

そんな横浜三昧の中で、新たな発見があった。おいらは30年以上、渡り鳥として日本全国飲み歩いている分、横浜をまったく知らなかった

のだ。横浜駅周辺も伊勢佐木町も野毛界隈も、詳しく知らない。音楽仲間やその他友人がどんな人生を送ってきたのかも知らないままだった。

ところが、今回の横浜三昧のおかげで、おいらが好きな呑み屋が沢山あることも分かったし、おいらの仲間は優しくていい奴等であることも再発見だ。

60歳以降の残された人生。渡り鳥ももちろん続けるけど、仲間と一緒に横浜で旨い酒も呑もう。出会った人々、訪れた街、聞こえてくる音楽、そして語らい盃を酌み交わしたすべての人々に感謝を込めて。

一年間、ありがとうございました。

そして本年もよろしく願いたします。



▲同級生がやっている居酒屋



▲黄昏の大岡川は美しい

みなさんがワクワクするような一年でありますように。